

50周年記念ページ

2020年、農業施設学会は創立50周年を迎えました。

創立50周年のご挨拶

農業施設学会長 川越義則
(日本大学生物資源科学部)



農業施設学会は、その前身である農業施設研究会として1970年7月に東京教育大学（現 筑波大学）にて開催された総会で設立され、1974年4月に現在の名称となりました。したがって、2020年7月で創立50周年を迎えることになり、北村豊前会長（筑波大）のもとでその記念事業が立案、準備されてまいりました。しかしながら、新型コロナウイルス蔓延により、東京オリンピック2020を始め、国内外の様々なイベントが延期や中止となり、農業施設学会が幹事学会として企画し筑波大にて開催予定であった農業環境工学関連学会2020年合同大会も中止を余儀なくされました。本来であれば、その合同大会にて創立50周年記念事業の一環として式典やシンポジウム等の記念行事を行う予定でした。ここに1年遅れとはなりましたが、学会設立総会が開催された同じ大学にて記念行事を開催する運びとなったことは大変喜ばしく、50周年記念事業計画担当理事の池口厚男元会長（宇都宮大）を始め、水谷孝一大会委員長（筑波大）、そして関係の皆様にご挨拶申し上げます。また、昨年の記念事業の一つとして河北農業大学にて開催予定であった中国農業工程学会との海外合同セミナーは、いつ海外に行けるようになるか不透明な状況で中止になってしまいましたが、企画に際しまして大変なお骨折りいただきました北村前会長に改めて感謝申し上げます次第です。

さて、この50年の学会の歴史を振り返るには、情報広報委員会により運営されている学会ホームページに記載の沿革が役立ちます。設立時からの学会活動が詳細に記載されており、学会ホームページが開設された以前の情報は歴代の庶務委員会や情報広報委員会のご尽力の賜物です。その時々のご社会や会員の関心事は、シンポジウムの内容、そして学会誌「農業施設」に掲載された論説や論文等のタイトルから推測されると思います。

おわりに、これまで学会で活動していただきました会員の皆様方と共に50周年をお祝いし、今後ともこの学会がカバーする広範な分野での会員の皆様方のご活躍と発展を祈念いたします。

農業施設学会の最近10年間の歩み



干場信司

元農業施設学会長

酪農学園大学名誉教授

北海道農業専門学校非常勤講師

農業施設学会では、学会の基本方針（原点、オリジナリティ）を示す「**学会の理念**」を、4年間にも及ぶ広範な議論を重ねて2009年に公表したが、この理念は現在も変わらずにホームページに掲げている。それは、「本会は、設立の趣意に基づき、生物・食料の生産から消費に関わる『空間』、とくに施設、設備、システムなどを対象として学術的に機能化・体系化し、農業施設およびその関連分野において実学として社会に貢献することを理念としています。」という言葉ではじまっている。農業と食生産に関するハード技術はもちろんのこと、それを支える資源・エネルギーの問題や、技術の評価をも含めた総合化が学会のねらいである。設立当時から現場との接点を大事にしており、筆者はその姿勢を「**現場から学んで現場に還す**」と表現している。

最近の10年間を振り返ると、最も大きな出来事は「**東日本大震災**」（2011年3月11日）であろう。本学会でもその復興に向けたシンポジウム「東日本大震災からの復旧・復興に向けた園芸技術と今後の課題」を宮城県名取市で2012年に開催した。また2014年には、「持続的な農業経営のための放射性物質対策技術－“これまで”と“これから”の安全・信頼確保のために－」と題するシンポジウムを福島県郡山氏で開催した。さらに2015年には、農業環境工学関連5学会の合同大会（盛岡）におけるシンポジウム「東日本大震災からの地域と農業の復興」の開催や、東北3県（岩手・福島・宮城）と農研機構との共催（宮城県岩沼市）によるシンポジウム「東日本大震災からの復興に向けた施設園芸の取り組みと今後の課題」の開催を通して、復興の支援に当たっている。

農業施設学会は2010年に**設立40周年**を迎えたが、それを記念して「**よくわかる農業施設用語解説集**」を2012年に出版した。これは農業施設に関する用語を見出し語として、日本語・英語・中国語の索引付きで紹介し、約3,200語の語句をわかりやすく簡潔に解説したものである。

学会誌に掲載されている論文等のテーマをみると、本学会の特徴が表れてくる。対象分野の広さは本学会の特徴であるが、畜産、園芸、食品の貯蔵・加工・流通、バイオマス資源・エネルギーの各分野、ならびにそれらを支える計測・分析技術、さらには技術の評価に関する研究にまで極めて多岐に及んでいる。学会誌「農業施設」の40巻から49巻までに掲載されている論文、資料、ノートを見てみると、畜産関連と施設園芸関連が共に32%と大きな割合を占めており、次いで流通・加工関連が16%、バイオマス資源・エネルギー関連が13%となっている。毎年開催されるシンポジウムのテーマも、前述の東日本大震災関連を除くと、「寒冷地域におけるヒートポンプと自然エネルギー利用の現状と展望」（2010年）、「食の安全を支える微生物制御技術」（2011年）、「亜熱帯地域におけるこれからの施設園芸」（2012年）、「農林水産物の6次産業化に向けての取り組み」（2013年）、「伸びる生鮮野菜の新戦略」（2015年）と続いており、まさに総合化を目指していることがわかる。

連携している他学会との棲み分けと言う視点から見ると、農業環境工学関連5学会（農業施設学会、農業食料工学会、日本農業気象学会、生態工学会、農業情報学会）や日本農業工学会（上記5学会＋日本生物環境工学会、日本農作業学会、農業電化協会、農業農村工学会、農村計画学会）の研究対象分野の中で、農業施設学会以外ではあまり扱っていない分野が畜産関連分野であろう。畜舎の環境や構造、家畜ふん尿管理などは、学会設立当時から現在まで続いている農業施設学会の重要な研究対象分野である。

2012年度に、学会誌の論文の種類として「**技術論文**」が加わり、44巻4号（2013年12月）から掲載され始めた。技術論文は、「社会的に有用な情報を含む農業施設および関連部門の原著」であり、研究論文の「農業施設および関連部門の原著で学術的に価値のあるもの、または農業施設の計画、設計、施工、管理、利用等に寄与するもの」と区別をしている。本学会の特徴である「より現場に近い（役に立つ）研究」を原稿の種類にも反映させたものである。

また、48巻1号（2017年3月）からは**総説「農業施設に関わる研究・技術の最近の展開」**の連載がスタートした。研究推進委員会が中心になり、数年にわたって検討してきた企画である。この号の巻頭言で当時の池口会長は、「現時点における農業施設を確認するとともに、「農業施設学」の研究者・技術者をはじめ、これから農業施設学を学ぶ学生の知識向上を目指して連載を開始致します。」と述べている。49巻4号（2018年12月）までに幅広い対象分野について17件の総説が掲載された。

そして最後になったが、学会の将来にとって最も大切な**若手研究者の活躍**について述べたい。農業施設学会では、2008年度から「若手の会」を発足させた。当初は、大会開催中に、若手研究者や学生が集まって交流する場を持つことから始まった。その内に、大会のプログラムの一つであるエクスカージョンを若手の会が企画するようになった。2014年度の大会からは、若手研究者と大学等に在籍する学生会員（または正会員）を対象に、それぞれ「口頭発表の部」と「ポスター発表の部」の合計4部門について、「プレゼンテーション賞」を授与することになった。さらに、2018年2月からは、通常の大会とは別立てで「学生・若手研究発表会」を開催しており、25件もの発表がなされた。2019年2月の「学生・若手研究発表会」には42件の発表があり、頼もしい限りである。このように若い研究者が大いに議論を交わし、お互いに切磋琢磨することによって、新鮮な発想が生まれるであろうし、ベテラン研究者たちへの良い刺激にもなるであろう。このことこそが、学会の極めて重要な役割である。同時に、農業施設学会ならではの**特徴・面白さ**（それが「学会の理念」）についても語り合うことができれば、さらに楽しくそして有意義な学会を維持することができるであろう。

農業施設学会創立50周年事業

農業施設学会・50周年記念事業計画委員会では下記の事業を企画、実施しています。

1. 50周年記念ページの開設

2. 50周年記念シンポジウムの開催

・2021年度農業施設学会大会(オンライン) 1日目(9月21日) 15:55~17:35

① 基調講演

「日本農業の展開と今後の技術革新の方向」

梅本 雅 氏((国) 農研機構 理事)

「農業施設とDX」

岸田義典 氏(株式会社 新農林社 社長)

「共乾施設を中心とした農業共同利用施設の課題と対応」

土方 享 氏(全国農業協同組合連合会施設農住部 専任次長)

② 若手会員との対談

3. 協賛募集事業

4. 総説のホームページ掲載

50周年記念事業計画委員会

委員長 池口厚男

水谷孝一

竹倉憲弘

梅谷知弘